

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：34401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00439

研究課題名（和文）ロマン主義的想像力の方法論史 18世紀ニュートン・パラダイムの帰納主義と仮説思考

研究課題名（英文）Romantic Imagination and the History of Methodology: Inductivism and Hypothetical Thinking in the Eighteenth-Century Newtonian Paradigm

研究代表者

中村 仁紀 (Nakamura, Yoshiki)

大阪医科薬科大学・医学部・講師

研究者番号：30582564

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、イギリス・ロマン主義の思考様式を、18世紀経験科学における帰納法の方法論上の問題から捉え直し、その限界のなかから生まれてきた「仮説思考」がいかにしてロマン主義時代の想像力／創造力の原理として発展していったかを歴史的に跡付けるものである。文学批評・哲学・科学・歴史・医学（生理学や病理学）といった複数の領域にまたがるS・T・コウルリッジのテクストを軸にしなが、ロマン主義における論証や理論構築の手続きの中に経験科学的な方法の痕跡を見出しつつ、それが19世紀前半の新しい学問諸分野を支えるパラダイムの形成にいかにかに寄与しているのかも合わせて考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、ロマン主義に対する文学研究的なアプローチから一旦離れて科学的方法論の観点から捉え直したことにある。一般的にロマン主義は18世紀科学の認識論の制約から自由になり、より創造的な思考や表現を可能にする芸術様式として捉えられがちであるが、本研究では、ロマン主義をむしろ（経験の集合から知を構築するための「原理」を模索するという点で）経験科学的思考が内側から変容していく歴史的過程のうちに捉える地平を提示した。また、ロマン主義の言説における論証や表現、言語運用を支える思考のあり方そのものを他領域との接点から考察することで、その学際的・領域横断的な性格に光を当てることができたと考える。

研究成果の概要（英文）：This research project reinterprets Romantic modes of thought in terms of the methodological issues associated with inductive procedures in 18th century empirical science. For this purpose I traced how hypothetical reasoning, which emerged from the limitations of inductivism, historically developed into a “principle” of imagination and creativity in the Romantic era. By chiefly examining the texts of S.T. Coleridge, which cover multiple fields of knowledge such as literary criticism, philosophy, science, history, and medicine (physiology and pathology), I analyzed the procedures of argumentation and the formation of theories as found in Romantic critical discourse. I also clarified how these Romantic ways of thinking contributed to shaping paradigms that supported various fields of thought that newly emerged in the early 19th century.

研究分野：イギリス・ロマン主義（思想）

キーワード：ロマン主義 想像力 仮説 ビルドゥング 体質・体制（constitution） 経験科学 帰納法

1. 研究開始当初の背景

本研究課題はイギリス・ロマン主義における「想像力」概念を理論化する際の方法論的意識がいかんして歴史的に生成したかを、科学史における「仮説」思考の観点から跡付けることを目的とするものである。従来の文学史的な理解によると、ロマン主義(文学・批評)は、経験科学的な認識論の制約から解放され、より自由で創造的な思考と表現を追求する芸術様式とみなされてきたが、現代ではこうした視点をさらにプラグマティズムの方向へと再解釈する動きもある。すなわち、ロマン主義は真理そのものの探究・立証ではなく「経験をいかにうまく語るか」に重きを置き、想像力と新しい語彙を通じて価値規範の刷新や社会的連帯の形成を目指す文化運動であり、その点で19世紀後半以降のプラグマティズムの源流と見なされている(リチャード・ローティ)。しかしながら、ロマン主義における思考の創造性/想像性が具体的にどのような形でプラグマティックな思考実践へと結びついて発展していったか、という歴史的状況については十分な議論がなされていない。本研究では、この問題を考察するために、ロマン主義時代の詩人・批評家たちの批評・思想テキストにおける思考プロセスを(認識論的には対立関係にあると考えられがちな)18世紀の経験科学における方法論を手がかりに分析することを目指すものである。

2. 研究の目的

ロマン主義と経験科学との接点を探るこれまでの研究では、当時の科学的成果がどのように詩人たちにメタファーやイメージ、アイディアのインスピレーションを与え、それらが文学作品に反映されているか、という作品評価の面からのアプローチをとったものが多かった。それに対して本研究では知を構築するための方法論に焦点を当て、18世紀中期あたりから「アナロジー」「仮説演繹法(hypothetical-deductive reasoning)」「総合(synthesis)」といった非帰納的なアプローチが重視されるようになってきた経緯を踏まえつつ、それがいかんしてロマン主義時代に「経験的な事象を再発見し、統一的イメージで再構築する」詩的資質として批評の中に取り込まれたかを考察した。また、ロマン主義が潜在的に内包している他領域との接点とその歴史的意義を明らかにするために、18世紀末から19世紀初頭にかけて新しく興隆した科学の諸分野において「仮説」運用が創造的思考としてどの程度許容・正当化されているか、またコウルリッジらロマン主義思想家たちがそこにどのような反応を示したのかも考察の対象とした。

3. 研究の方法

(1)ウィリアム・ワーズワスやサミュエル・テイラー・コウルリッジらロマン主義の人々が「想像力」という概念を理論化する際、それを「無からの創造」ではなく、経験に新しい光を当ててそこから知を再構築する詩的資質として捉えている点に注目し、その論証手続きを知識形成の方法論の文脈から考察した。とりわけ、コウルリッジが機械論的だと批判していたデイヴィッド・ハートリーの*Observations on Man* (1743)における「観念連合」(association of ideas)の理論形成における「総合」的アプローチ、およびコウルリッジの1810年代以降のノートブックに見られるHypothesisとHypopoiesisという2種類の仮説思考の区別を重要な論点とみなし、それらがどのような形で彼の文学批評(特にワーズワスに対する批評)の中に反映されているかを検証した。

(2)ロマン主義における歴史観、とりわけリベラル・アングリカニズムの伝統に基づく国家や共同体の歴史的生成の「原理」をめぐる議論の特質を、18世紀の歴史学(ヴィーコやヘルダー)との関わりから検討した。それにあたり、現象の多様性とその背後にある理念的統一性をいかんして説明するか、という論点が、18世紀末か19世紀初頭の自然科学や生命科学における「生命(Life)」という仮説を正当化する上でも重要になっていた点を踏まえ、ロマン主義時代の歴史生成に関する理論をこうした領域横断的な方法論の具体例とみなした。コウルリッジの*Constitution on the Church and State* (1829)において英国社会が歴史的に生成変化するための原理として示されている“constitution”(「国家体制」)という概念を同時代の生理学や病理学の影響から考察した。また、ワーズワスの*The Prelude* (1805)における自己形成の問題を歴史的時間という観点から解釈しつつ、いかんそれが19世紀以降の教養小説(Bildungsroman)的な原理へと展開していったかの経緯を分析した。

(3)ロマン主義批評における歴史的言語観を、18世紀末の言語文献学との関わり、および1790年代以降飛躍的に発展した化学における元素の同定・命名・システム化のアプローチからの影響から、考察した。特に、1810年代半ば以降のコウルリッジが哲学的論述や文学批評を行う際に常々意識していた「類義語区別(desynonymization)」が、アントワーヌ・ラヴォアジエの元素概念やハンフリー・デイヴィの電気分解のイメージからどのような影響を受けているかという点

に焦点を当て、その歴史的意義を考察した。

4. 研究成果

「3. 研究の方法」の(1)～(3)のそれぞれの成果は以下のとおりである。

(1) 18世紀の経験科学においてもすでにアイザック・ニュートンやデイヴィッド・ハートリーに(帰納的手続きを標榜しながら)帰納法の規範を逸脱するような仮説思考を許容する発想があり、コウルリッジの方法論上の問題意識もその延長として捉えることができることを明らかにした。また *Biographia Literaria* (1817)において彼が詩人の想像力を評価する際の根拠としていたのが(単なる機械論的説明を正当化する架空の物質ではなく)経験科学において発見的理解を可能にする諸々の有効な仮説であり、その点で、ロマン主義詩学を機械論的発想に対する対抗言説としてではなく、経験科学の知識形成に関する洞察を内部から拡張する試みとして捉えられることを示した。

(2) コウルリッジが *On the Constitution of the Church and State* で用いた“constitution”が、伝統的な政体/生体のアナロジーに根ざしながら、究極目的を備えた有機体としての英国社会を捉えるために機能している概念であること、さらにそれが19世紀初頭の生理学・病理学の影響から「体質」としての“constitution”の病的状態(退化や腐敗)から逆説的に英国社会の「健全さ」を説明するための参照点となっていることを明らかにした。またワーズワスにおける「教養小説」(Bildungsroman)的な自己形成のあり方を、イマヌエル・カントが美的判断の根底にあると考えた「目的なき合目的性」という観点から考察し、ロマン主義以降の「自己をめぐる経験記述」の方法がこうした(単なる直線的で機械論的な目的論に回収されない)生成変化の考え方に根ざしており、それがヴィクトリア朝時代の教養小説の中にも引き継がれ、チャールズ・ダーウィンの生命進化の考えとも思想的に結びついている現象理解の原理としてみなすことができることを明らかにした。

(3) コウルリッジが「類義語区別」を実践し始めた1800年代前半あたりのノートブックを詳細に調査し、化学の分野で当時新しい元素と認識されていた「熱素(caloric)」を定義する方法が彼の言語意識にも流れ込んでいることを確認し、かつそうした手続きが1810年代以降に彼の観念論的な弁証法の思考を支えていること、さらに、それが唯物論的な元素同定の考え方を超えて現象の原理を洞察するための創造的な思考へと発展的に変化していることを跡付けた。これにより、18世紀の唯物論・機械論は思想史的に見て単にロマン主義時代の観念論によって乗り越えられるべき対象だったわけではなく、方法論の次元で連続性と差異を持ちつつ自己変容していた思考様式であることを示唆することができた。

研究期間全体の成果としては、コウルリッジ中心の研究が多くなったため当初予定していたロマン主義全体の「仮説」運用に対する包括的な見通しを提示することまではできなかったが、ワーズワス詩学における自己語りの思考様式とビルドゥング(形成・教養)概念の科学史的文脈、化学と言語文献学との接点、生理学・病理学に基づいた政体アナロジーを使った歴史観等、ロマン主義パラダイムにおける仮説思考の射程や可能性を様々な角度から考察したことで、今後ロマン主義時代の他の詩人や批評家のテキストに見られる方法論的問題を論じる際のテーマや論点を複数提示することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中村仁紀	4. 巻 47
2. 論文標題 『友』におけるコウルリッジのジャーナリズム的意識と読むことの哲学	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『イギリス・ロマン派研究』	6. 最初と最後の頁 71-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村仁紀	4. 巻 44
2. 論文標題 S. T. コウルリッジにおける仮説思考の射程－経験科学におけるHypothesis/Hypopoiesisの方法論的問題と想像力概念	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 イギリスロマン派研究	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村仁紀	4. 巻 51
2. 論文標題 S. T. コウルリッジの思考実践に見るローティ的プラグマティズムおよびリベラル・ユートピアの歴史性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪医科大学紀要 人文研究	6. 最初と最後の頁 36-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村仁紀	4. 巻 42
2. 論文標題 『文学的自叙伝』におけるプラグマティズム（第43回全国大会シンポジウム要旨「今、コウルリッジの『文学的自叙伝』をどう読むか」 文学研究におけるその現代的意義）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 イギリスロマン派研究	6. 最初と最後の頁 54-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yoshiki Nakamura	4. 巻 60
2. 論文標題 Review: Andrew Bennet (ed). William Wordsworth in Context (2015)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies in English Literature	6. 最初と最後の頁 71-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村仁紀	4. 巻 47
2. 論文標題 『フレンド』(1809)における「新聞読者」像とコールリッジのジャーナリズム的意識(第48回全国大会シンポジウム:「コールリッジと出版文化」)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『イギリス・ロマン派研究』	6. 最初と最後の頁 109-110
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村仁紀	4. 巻 48
2. 論文標題 化学史における熱素とコールリッジの「類義語区別 (desynonymization)」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『イギリス・ロマン派研究』	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoshiki Nakamura	4. 巻 65
2. 論文標題 “Excrescences of Life”: Coleridge's On the Constitution of the Church and State and Physiology of Constitution	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Studies in English Literature	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中村仁紀
2. 発表標題 『フレンド』（1809）における「新聞読者」像とコールリッジのジャーナリズムの意識
3. 学会等名 イギリス・ロマン派学会第48回全国大会（シンポジウム「コールリッジと出版文化」）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村仁紀
2. 発表標題 ロマン主義における経験記述の方法と反 教養 的思考 WordsworthとDarwinの「目的なき合目的性」
3. 学会等名 日本英文学会第91回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村仁紀
2. 発表標題 コールリッジの同義語区分（desynonymization）とその化学史的文脈 熱素についての彼の解釈をめぐって
3. 学会等名 関西コールリッジ研究会 第177回例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村仁紀
2. 発表標題 『フレンド』（1809）における「新聞読者」像とコールリッジのジャーナリズムの意識（シンポジウム「コールリッジと出版文化」）
3. 学会等名 イギリス・ロマン派学会第48回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yoshiki Nakamura
2. 発表標題 Romantic Modes of Thought in Comparative Anatomy and Palaeontology in the early Victorian Era
3. 学会等名 Living Ideas Seminar: The Living Ideas Project (Shimane University) (招待講演)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------